

中國出土資料學會
平成22年度第1回例会

日時：平成22年7月17日（土）
受付開始 12：30～
研究報告 13：00～17：00

場所：東京大学法文2号館2番大教室
（東京都文京区本郷7-3-1）

会場へのアクセス：地下鉄丸ノ内線・大江戸線本郷三丁目徒歩8分、
南北線東大前徒歩3分、千代田線根津徒歩10分

報告Ⅰ 青木 俊介（学習院大学東洋文化研究所PD共同研究員）

発表題目：睡虎地秦簡「法律答問」95簡からみる都官と県「官」

発表概要：睡虎地秦簡「法律答問」95簡とは、

辭者辭廷。・今郡守爲廷不爲。爲毆。辭者不先辭官長・嗇夫。可謂官長。可謂嗇夫。命都官曰長、縣曰嗇夫。

という条文である。「法律答問」についてはすでにいくつもの注釈が発表されているが、この条文に対しては矛盾をきたしていたり、無理のある解釈が目立つ。

本条文を読み解くには、「嗇夫」が何を示しているのか、そしてなぜここに「官長」が登場するのかを理解する必要がある。里耶秦簡などの新出史料を利用しながら条文の正確な解釈を試み、それを通して秦代の県における都官と県官の状況を考察する。

報告Ⅱ 武田 時昌（京都大学人文科学研究所教授）

発表題目：黎明期の科学文化—簡帛資料の新証言—

発表概要：中国科学の基礎理論は、漢代に『周髀算経』『九章算術』『黄帝内経』『神農本草経』等が編纂され、体系的に整理されることによって確立する。しかし、当時に存在した科学書や研究者集団に関して、史書には何も語られておらず、理論形成の具体的な様相を窺うことができなかった。ところが、二十世紀後半以降に新たに出土した竹簡、帛書には、数学、天文暦術、医薬学から養生術、占術に至る数多くの著作が含まれており、黎明期の科学文化を探るうえで有益な証言が得られるようになった。そこで、本発表では、主要な著作の理論分析を行いながら方術から術数学への変遷を素描し、中国科学のパラダイム形成がどのようなものであったのかを考察する。

報告Ⅲ 陳 松長（湖南大学岳麓書院教授）

発表題目：从岳麓秦简看睡虎地秦简《关市律》的性质

発表概要：睡虎地秦簡には「関市律」に関する律文がわずか一条しかないが、発表されて以来、それを疑問視するものはなかった。しかしこの度発見された岳麓書院秦簡及び張家山漢簡中の内容が基本的に同じ律文を利用してテキスト校勘と比較分析を行った結果、いわゆる睡虎地秦簡の「関市律」のテキストには明らかな誤写と脱文があることが分かった。本発表では、いわゆる「関市律」の律文に書かれているのは実際には「金布律」の内容であり、「関市」と題されているのは恐らく抄写の誤りであることを指摘する。

なお、本発表では、岳麓書院秦簡の概要、整理状況についての紹介も行う予定である。

☆参加費(資料代) 500円

☆非会員の来聴を歓迎します